

子どもの頃、僕たちはいつも夢見ていた。明日はきっといい日になるんだ。そう思っていたも生きていた。目に映る景色は輝いていたし、なんだか毎日楽しかった。でも、今は違う。僕らも大人になってしまった。あと数年で就活をしなければならない。社会人になったら毎日仕事、仕事、仕事…休む暇なんてありはしない。いや、下手をしたら解雇されて人生終わりか？ああ、なんて不幸な人生なんだ！夢も希望もないじゃないか！現実なんて所詮こんなもんですわ。

皆さん、こんなお先真っ暗な世の中でいいのでしょうか？きっと今に始まったこっちゃありません。毎日毎日決まりきった仕事をして、自分ってなんて不幸なんだって嘆きながら、人類は古来より幸せな人生を求めて茫漠とさまよってきました。

では皆さん。皆さんの幸せっていったい何ですか？想像してみてください。おいしいものを食べている時、恋人といる時…。幸せにはいろいろな形があります。みんなそれぞれの幸せを追い求めている。人生は千差万別です。生い立ちも違えば好みも違う。それが個性です！幸せの多様さは、要は個々人の個性から生まれてきます。幸せは自分で決めるものです。自分の個性が決めるものです。

てことは、僕らが幸せになるために必要なことって、自分の個性をありのままに認めることなんじゃないかって、思うんです。自分の個性を目一杯発揮して、そこに価値を見出すこと、そうやって自分が世の中に必要な存在なんだ、そう思えるようになることが必要なんじゃないのでしょうか？それって心を豊かにすることなんじゃないのでしょうか？

今、大人って個性を発揮できているのでしょうか？大人になったら誰もがやらなければならないことが一つあります。労働です。毎日似たようなスーツを着て、満員電車で揺られ、馬車馬のごとく働いて…大人ってみんなこういう生き方を強いられています。明らかに個性を発揮できていません。じゃあ労働を辞めればいいじゃないか！そうはいかないはずですよ。もし労働をしなかったら、お金が手に入らず、生活してゆけません。幸せなんて追求できるはずがありません。労働は、人が幸福を追求するうえで不可欠な基盤といえるのです！本弁論の目的は、労働と人のあり方を抜本的に見直し、万人がそれぞれの幸せを心ゆくまで追求できる社会を作り上げることです！

現状

では、大人たちが幸せを追求することを妨げているものはなんのでしょうか？

大人はみな社会人であることが求められます。大人になったら社会に出なければなりません。そこでは社会人でなければ一人前とはみなされないのです！「社会人」とは何か？私はいつも考える。先輩のいうことは何でも聞く。言われた通り肅々と、かつ要領よく仕事をする。昇進のために上司にこびへつらう。酒の席では先輩にビールをつぎ、話題を提供し…一人前の社会人の条件を挙げてみれば、こんな感じです。大人は言いたいことが言えないんです。子どもだったらこういうでしょう、「お父さんってつまらないことをやっているんだね」って。

人間って、こんな「つまらない」ことをやるために社会を作ったのでしょうか？たぶん、

みなそう感じているでしょう。でも、それは仕方がないことだと思っているのでしょうか。もちろん、私もその一人です。そして現に「社会人」のまねごとをやっている。だけど、他の選択肢ってないんでしょうか？僕らは社会人になるしか選択肢がないのか？

#### 原因

今こんな矛盾した世の中になっている。なぜでしょうか？それは日本人にとって労働が他律的なものであるからです。他律——つまり、自分の意志に反して、他人の意志に従わざるをえない状態です。例えば長時間労働とか、休暇が取れないだとか、家族と離れ、孤独な単身赴任を強いられるとか。会社の命令は絶対です。そこに自分の意志なんてものは存在しません。

資本主義経済の下では労働はつねに自分という存在が疎外されたもの、つまり労働に自分自身を見出すことができないことを宿命づけられています。これに対しては、労働者は被雇用者であり、給料をもらっている以上、雇用者への従属は当然だという見方ができます。そしてそう思えない労働者は甘えるな！の一言で片づけられます。逆に、自分の個性が発揮できない仕事などもってのほかだから辞めてしまえ、という見方もできるでしょう。それでもやめられないのが普通です。それどころか、やめたら次の仕事がないかもしれないという恐怖感から余計に従属してしまうことだってあります。例えば、単身赴任。これは日本独特の制度です。家族を犠牲にするものであるため断りたい人が多くてもおかしくはありません。しかし現実には断れる人は非常に少ないでしょう。皆さんのお父さんの中にもいませんか？これは日本の会社制度が多分に他律性を有しているからに他なりません。

#### 政策

このように一つの企業に従属してしまっている労働者に対し、その従属から解放するために私が提案する政策は三点です。

まず一点目。採用方法を企業別の採用から業種ごとの採用に変えます。その上で、その業種を行っている企業に対し人材を割り当ててゆきます。例えば、アパレル業界に就職したい人がいたとします。この制度により彼は、アパレル業界という業種につくための就職試験を受けます。そのあとで、ユニクロやしまむらといった企業に割り振られてゆきます。同一業種内での人材流動性が高まることで、労働者が一つの企業に従属しなくてよい関係を作り出します。流動性が高まった結果、同一業種内で転職をすることが容易になり、労働者の他律性はなくなります。つまり、いつでもしまむらを辞めてユニクロに移ることができるのです。また、従来は、企業の人事が仕事を割り当ててきました。労働者の向き、不向きを企業が勝手に決めていたことになります。しかし、企業の言いなりになる人材がいなくなるため、当然仕事はプロジェクトチームを作って、各業界から人を採用してゆく形になります。例えばユニクロが女性用の新商品を開発したければ、しまむらやワコールなど、同業種の人材を集めることができます。こうすれば、労働者はやりたい仕事に応募できます。ただし、無制限に採用できるわけではありません。そのため、二点目。人材を評価する機関を設立します。

これはその人の仕事能力をデータベース化して、公的機関に登録しておきます。

その一方、正社員の仕事もなくなるわけではありません。その企業ごとに専門的に行われている、ずっと勤めている人にしかできない仕事は当然ありますから、その仕事は正社員がやることになります。企業としてはその正社員にはいてもらわなければ困る訳ですから、彼らの待遇もよくなります。

当然この選考から漏れた人は失業者となるので、それを吸収する場所が必要です。そのため、三点目の政策として、失業対策事業を行います。具体的には、国が、失業者が希望する業種の経営体力のある企業に派遣します。失業者達には失業保険として月7~8万円を国が支給し、残りの生活に必要な分は企業から成果給として支払われます。現在の失業保険の予算額が2兆4000億円、失業者がおよそ200万人ですから、財源の確保は可能です。その上で、一年を上限とし、派遣先の企業に再就職できるようにします。

労働というものはいつも他律的なものです。古代エジプトのピラミッド建設で働いていた労働者、法隆寺の建設に関わった労働者、日本の復興を果たし、一丸となって高度経済成長を支えた労働者…みな、そんな他律的な労働に耐えてきました。そして今なお、その現状は変わっていません。それが、生きてゆくことのつらさであり、哀しみでもあり…けれどその中にあるささやかな楽しみが、彼らの救いなのでしょう。僕らの多くはもうあと少ししたら、労働者になります。夜のとぼりが下りる頃、行き交う人の背中を見て人生の行く末に思いをはせる。幸せへの道には重いとぼりが下りています。人類が長い歴史を経て今なお向き合い続けなければならない生きる哀しみ。「ささやかでいい、幸せになりたい…」そんな労働者たちの声なき声が今なお、この世界にこだまし続けています。皆さんは今、幸せですか？